

能楽面袋に関する染織文化史的研究—分野横断的検証による
Noh and Kyogen Mask Covers
—Historical Textile Research Using Cross-Disciplinary Methods

門脇 幸恵*¹⁺, 田邊 三郎助*²⁺, 杉山 未菜子*³⁺, 花田 美穂*⁴⁺
Yukie Kadowaki*¹⁺, Saburousuke Tanabe*²⁺, Minako Sugiyam*³ and Miho Hanada*⁴⁺

*1 独立行政法人日本芸術文化振興会国立能楽堂 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-18-1

National Noh Theatre of Japan, Japan Arts Council
4-18-1 Sendagaya Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 町田市立博物館

Machida City Museum

*3 福岡市博物館

Fukuoka City Museum

*4 米沢市上杉博物館

Yonezawa City Uesugi Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The aim of this research project is to bring attention to the multi-faceted importance of the textiles intimately associated with the intangible cultural property of Noh drama through on-site surveys.

The robes that Noh actors wear are the central apparatus associated with the performance of Noh drama. However, mainstream research on Noh has focused almost exclusively on the literary aspects of Noh to the exclusion of the material history of the objects essential to its performance. Furthermore, where masks and robes have been studied under the rubric of art history, research has taken place in separate fields of specialization. Masks are of course key pieces of equipment for the performance of Noh, but they are also considered to be the lodging place of the spirit of the kami (god) during a performance. As a natural consequence of this

way of thinking, the bags or “covers” created to protect the masks during storage were often made of extremely valuable silks, considered appropriate to the purpose. Many of these covers are in fact made from fragments of famous textiles, imported foreign textiles, and from fragments of Noh robes themselves. Although their status as historically significant textiles is indisputable, the covers themselves have rarely been the subject of enquiry.

This research project attempts to fill this lacuna by collecting and organizing data on the types of textiles used, the forms of the covers, and any accompanying notes or other information found during surveys. The

*1) yukie@ntj.jac.go.jp

surveys conducted focused on covers associated with masks from ex-daimyo collections, reflecting our conviction that the mask covers are most fruitfully researched within the context of their role amongst other objects in daimyo collections of what might be called “cultural apparatus.” Many extant masks and robes now in museum, temple, and shrine collections are originally from daimyo collections.

Mask covers are of particular importance in establishing the provenance of these masks and robes. This research builds on previous work on masks from ex-daimyo collections as we attempt to establish connections between the covers, and the masks and robes they may originally have been associated with. The resulting database of our findings is an attempt to provide data of cross-disciplinary relevance for both art history and Noh studies.

【要旨】

本研究は、能楽面袋の調査・検討を通じ、芸能と相即不離の関係にありながら、無形文化の道具として扱われている染織文化財に光を当て、その文化的価値を複合的に検証しようとするものである。能楽という無形文化に付随する道具の代表的なものは面と装束である。従来の能楽研究は、文献学研究を主流としていたため、これらの道具について現存する実物に即した研究は少ない。また、美術史においては、能面・狂言面は彫刻史、装束は染織史の研究者が、分野ごとに研究対象としていた。能面は、能楽の道具ではあるが、その芸能の精神性を象徴する、いわば「依代」として別格に扱われる。ゆえに、それを保護する面袋も、各時代において珍重される染織品が用いられて然るべきものである。実際、面袋には、名物裂や舶載の染織品、さらには能装束裂から作られた例が散見され、相応の文化材的価値を備えていることは推測されていたが、面袋が本格的な研究対象と見なされる機会は少なかった。このような現状を踏まえ、面袋をなす裂・生地、形状、銘記等の付帯情報を整理することで、能面・能道具の研究に新しい視点をもたらしたいというのが、本研究の趣旨である。

実際の調査研究にあたっては、大名家旧蔵の能面に付随するものを中心にした。それは、面袋が、大名道具の一部として複合的に研究されるべきものであると考えたからである。現存する多くの面・装束は、諸大名家の旧蔵品が、様々な経緯を経て、美術館・博物館や寺社など現所蔵者の元へ至っているが、面袋は、旧蔵者、また伝来の経路について物語る史料価値を有する。また、大名家旧蔵の能面は、調査公開がなされた資料群も相当ある。本研究では、先行する能面研究調書に追随する形で、本来一体として存在していた面袋の調査を行い、データベース化を図り、染織文化史ならびに美術史・能楽史研究の基礎資料として分野横断的アプローチを試みるものである。

配当決定額

平成 23 年度	1,190,000 円
平成 24 年度	1,190,000 円
合計	2,380,000 円

【研究の目的】

能楽面袋は、その内に収納される能面同様、調製にあたり相応の関心と財力が払われており、材質と

なる染織品自体も史料的価値が高い。よって、能楽面袋に対する諸分野にわたる横断的研究は、能楽文化財の複合的研究には欠くことのできないものである。しかし、能面や能道具に関する先行研究においては、能面に付随する面袋は、たとえば、茶道具における仕覆のように注意が払われることがほとんどなく、調書が取られることも少なかった。また、著しく劣化した面袋・面当が廃棄対象と看做されることも多く、調査は急を要する。従って、より効果的に調査を進める上で、能面の先行研究において実績のある彫刻史及び芸能史の編年的研究成果を活用することとした。本研究は、面袋主体の視点にたった調査から新たに得られる染織史・服飾史的研究成果を、既存の能面研究データと共に整理・分析することで、近世の大名道具において重要な位置を占める能楽文化財について、より正確な歴史的見解を得ることを目的とした。

【研究の方法】

本共同研究の研究構成員である田邊三郎助には、長年にわたる能面調査の実績があり、旧大名家所蔵面の移動や流出入についても注意を払ってきた。その田邊能面調書に基づき大名家の伝来が明らかな作品群から調査を開始することとした。また、能道具類は、売り立てにより市場に流出した作品も多々あり、それらを多く含むと考えられる個人コレクションをも調査対象とする。

- ・ 調査項目の選定：面袋を主たる調査対象とした例は無く、調査方法の指針となる調書フォーマットを作成する。
- ・ 調査手順：面袋・面当・付属物の撮影。それぞれの形状・法量の計測、材質の検証。銘文等の記録。
- ・ 調査作品の選定：田邊調書を基に調査対象を選定する。
田邊調書のある作品群は、調書と内包する能楽面を照合しつつ袋を調査する。
田邊調書のない作品群は、能楽面と袋の双方を調査する。
- ・ データベース化：写真及び調査内容を順次データベースに移入する。

【研究の実施計画】

[平成 23 年度]

以下の方法を通して、袋・面当の調査の重要性を明らかにすることとする。

① 田邊作成能面調書をベースにした調査対象の明確化と調書データの体系化を行う。

本共同研究の研究構成員である田邊三郎助には、長年の能面研究の実績があり、その調書データ整理をすることで面袋・面当ての調査対象の明確化をはかる。

② 調査方法・調書形式について検討する。

③ 地方調査

先行する能面・能装束の研究から、国立能楽堂の所有・保管の能面・能装束と、伝来の経緯等において強い関連を持つことが推定されるコレクションの調査を行う。

④ 調査した情報および画像をデータベース化する。

[平成 24 年度]

① 前年度の調査、データの蓄積を継続する。

② 調査データの検証と集約を行い、データベース化を継続する。

【研究の成果】[23、24 年度]

No.	調査日	既存調査 と照合可 能な作品 群	能楽面の 調査も件 う作品群	名称	所在/所属	内容	点数	備考
1	2011/9~ 2013/2	○		旧カネボウコレクション	国(文化庁)/国立能楽堂保管	大聖寺藩前田家伝来面袋	169	大聖寺藩前田家伝来。旧鐘紡繊維美術館旧蔵。
2	2011/9~ 2013/2	○		国立能楽堂能楽面	国立能楽堂	大聖寺藩・加賀藩前田家・因州藩池田家伝来等面袋	70	開場以来収集した作品群
3	2011/8~12		○	松坂屋コレクション	(財)Jフロントリテイリング史料館	加賀藩前田家伝来面袋	42	加賀藩前田家伝来。
4	2012/2/6~8 2013/6/7~10		○	マーヴィンコレクション	和歌山県立美術館保管	紀州徳川家・加賀藩前田家・因州藩池田家伝来面袋	140	能面コレクター、スティーブン・E・マーヴィン氏のコレクション。
5	2012/2/16	○		細川家旧蔵能楽面	(財)永青文庫	細川家伝来能楽面袋	46	旧肥後藩主・細川家に伝来した能楽面。
6	2012/3/12~13		○	濱村コレクション	長野県上田市立博物館保管	藤井松平家伝来面袋	70	濱村家旧蔵能面(62面)・狂言面(8面)計70面は、松平忠礼よりの拝領品といわれる。
7	2012/11/5~6 2012/11/5~6		○	東雲神社能楽面	愛媛県松山市東雲神社	久松松平家伝来能楽面袋	195	丸亀城主京極家旧蔵、松山藩主久松松平家伝来。明治維新の際に東雲神社に寄進された。能面153面、狂言面42面(愛媛県指定文化財)。
8	2012/7~12		○	尾山神社能面	金沢能楽美術館保管	尾山神社前田家寄進面袋	24	加賀藩前田家伝来。侯爵前田利嗣公から奉納された能面が二十数面残る。(金沢市指定文化財)
9	2012/7~12		○	金沢能楽美術館能楽面	金沢能楽美術館	佐野家旧蔵面袋	14	シテ方室生流佐野吉之助収集面(金沢市指定文化財)
10	2012/7~12		○	江沼神社能楽面	石川県加賀市江沼神社	大聖寺藩前田家旧蔵	39	大聖寺藩前田家旧蔵面
11	2011/9~ 2013/2	○		福岡市博物館能楽面	福岡市美術館	黒田家・南部家・仙台藩伊達家等、伝来能楽面袋	18	開場以来収集した作品群。
12	2013/1/7	○		大倉コレクション	大倉集古館	因州藩池田家伝来面袋	100	創設者大倉喜八郎のコレクション。因州藩池田家伝来品も多く含まれる

平成 23 年度調査
 平成 24 年度調査
 平成 23・24 年度調査

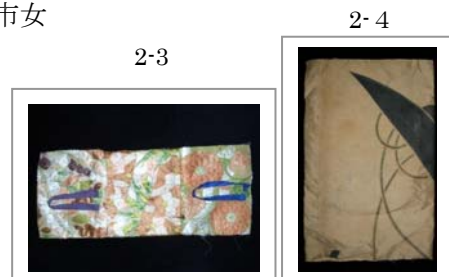
1. 国(文化庁)

国(文化庁)所有の能面(国立能楽堂管理)は、大聖寺藩前田家旧蔵であることが知られていた。14代藩主・前田利鬯亡き後、三井本家が引き取り、その後、鐘紡繊維美術館の所蔵となっていた。面袋や面当は、鐘紡繊維美術館において三分の一近くが新調され、旧来品は廃棄されている。旧来の面袋については、形状の点で、後述する石川県内の寺社に伝来する能面の面袋と共通する特徴を有するものがある。それらは、大聖寺藩前田家に固有、あるいは、金沢本藩・前田家とも共有する特徴と考えられる。

2. 国立能楽堂

国立能楽堂の能面には、能面本体の面裏に付された銘記や付随の折紙等から鳥取藩池田家、盛岡藩南部家、長州藩毛利家、土佐藩山内家など、伝来が判別するものも多い。その一方、伝来未詳の作品も少なからずある。中でも、小ぶりの面箆一棹に収納されている狂言面群は、その作柄から制作年代が上がるのが推測されるが、これらの面袋の裂(2-3)は、いずれも桃山~江戸時代初期と推定される。とりわけ、縫箔と初期唐織を縫い合わせた作例や、箔で雪輪・藍で市女

笠を表した練緯による例(2-5)は、注目すべきものである。同形の面箆筒に入った狂言面が、某実演家のもとにあるが、これらにも同じ練緯や寛文~元禄小袖裂を用いた面袋が伴っている。



桃山～江戸時代初期の小袖あるいは小袖型装束の裂地は、それ自体、古美術品として収集・賞翫の対象であり、この狂言面の旧蔵者が裂に関心の高かったことを窺わせる。

また、伝来不詳の能面の面袋中に、旧カネボウコレクションと同じ裂を用いた例や、後述するように前田家旧蔵が明らかである松坂屋コレクションの面袋と緒の形状を同じくする例が見られ、これらは大聖寺藩もしくは金沢藩前田家旧蔵と推定できる。

3. 松坂屋コレクション

松坂屋コレクションの能面群については、金沢藩主前田家の道具類の売り立てが行われた際、箆笥一棹に収納されていた能面を、箆笥ごと収集したことが分かっている。染織品の参考資料を収集していた松坂屋は、むしろ面袋に魅力を感じ袋のみを購入しようとしたが、面と一緒にないと売れないと断られ、箆笥ごと購入したという逸話が残る。松坂屋コレクションの面袋は、更紗や錦、縹珍など、美しくまた珍しい裂が多く、その形状も様々で、前田家の面袋の多様さが窺える好例となっている。

4. マーヴインコレクション

米国の能面コレクター ステファン・E・マーヴインの収集体。近年の収集であり、様々な伝来のものが含まれる。紀州徳川家伝来作品はやはり面箆笥ごと伝来しており、これは紀州範お抱え能役者の伝書¹にも記される。能面自体の面裏に付された銘記から、仙台藩伊達家、盛岡藩南部家、鳥取藩池田家の旧蔵と判明する例も多い。面袋は流通過程において近代の染織作品と取り替えられたものが多い。面袋の調査により、松坂屋コレクションにも見られた能装束裂の使用や、袋裏地の墨書から金沢藩前田家旧蔵と判明したものがある。また、袋裏地の墨書からは能面についての新たな事実も解り、面袋の史料価値の高さをよく示している例が多い。

1 『隣忠見聞集』能楽史料 第二編

5. 細川家の面袋—財団法人永青文庫

財団法人永青文庫には、細川家の能道具類が伝来し、旧藩時代の姿を留めている。また、細川家に伝来する能楽面は時代の古い作品が多いが、現在使用されている面袋は、濃い萌黄地に九曜紋を織り表した金襴に統一されており、旧来の面袋は別に保管されていた。また、面袋に題箋があることはまれで、直接面の名称が墨書されていることが多い。記されている面の名称と能面のリストの照合を試みたが、完全な一致を見なかった。また、面袋に記された能面の名称や使用されている染織品の状況、さらには現状を考え併せると、面袋は幾度となく作りかえられていることが窺えた。旧面袋中、初期唐織をはじめとした能装束裂を用いたものがあったが、これは旧藩時代から使用されていたものの一部と考えられる。次にビロード染織など、明らかに近代の染織品を使用した作品もあり、旧来の作品の劣化に伴い、ある時代に作り替えがなされたと考えられる。

6. 藤井松平家の面袋—濱村コレクション(上田市立博物館)

濱村家は江戸時代から続く上田市の旧家。濱村コレクションの面袋は、縹色の金襴の作品群(6-1)と丸に井桁紋を染め抜いた黒紬地を用いたもの(6-2)、とナイロン風呂敷様のものに大別できる。縹色地金襴は藤井松平家当時の面袋と考

6-1



6-2

えられるが、黒紬地の面袋は、丸に井桁紋は濱村家の紋であることから、濱村家に入ってから作られたものと考えられる。さらに能面の質も均質ではなく、世襲面打ち家の作風とは異なる鄙びた作品も多く含まれることがら、すべてが藤井松平家の伝来作品とは考えにくい。

7. 久松松平家の面袋—東雲神社

東雲神社の面袋に用いられている裂は、絞り防染により大きな葵紋を染め表した紫平絹を用いた作品群と、錦や繻珍、または舶載品と考えられる縞織物を用いた作品群、そして浅葱もしくは黄色の木綿地を用いた作品群とに大別できる。

葵紋紫平絹で作られた袋(7-1)には「文政三年庚辰」の年記があり、この作品群の伝来を確かなものとしている。東雲神社にはこれより一周り小さいと考えられる葵紋を染抜いた紫縮緬の方形の布も伝わるが、いずれもどのように使用されていたかは不明である。いずれにせよ、こうした面袋の材質の相違は、現在の東雲神社の能面の中に、久松松平家の御能で使用されていたものと地元の奉納能に用いられていたものが混在することを示していると考えられ、今後更なる調査を要する。



8. 尾山神社

前田本家15代当主・前田利嗣から寄進された24面が伝わる(現在は、金沢能楽美術館保管)。旧来品と、近代の染織品に作り替えられてしまったものがある。しかし、その形状は、やや例外的なものを含むものの一貫しており、近代の作り替え品も、旧来品の形状を踏襲する、いわば、「写し」の意識で調製されたことがうかがえる。また、その形状は旧カネボウコレクションの面袋と共通することから、この形状こそ、前田家の能道具におけるアイデンティティを反映させる要素であることを思わせる。

9. 金沢能楽美術館

金沢在住のシテ方宝生流佐野吉之助が実演のために収集した作品で、現在金沢市の所有となっている。市場から収集されたものが多いため、能面の伝来は多様であり、面袋の質にもばらつきがあるが、尾山神社の面袋と共通の形状のものもあり、前田家旧蔵品が含まれていることが窺われる。

10. 江沼神社

江沼神社は旧大聖寺藩邸内にあり、旧藩時代からの能道具が残されている。面箆筒は旧カネボウコレクションと同形だが、収納されている能面は旧カネボウコレクションの写しと考えられる作品が多い。面袋は裂損が激しく、原形を留めているものは少ないが、国有の作品と同様の裂地を見出すことができた。

11. 福岡市博物館

福岡市博物館の能面群は、近年の収集によるもので、おもに、能面の面裏に記された銘記から、複数の大名家の旧蔵品が含まれていることが判明していた。面袋は、近代の染織品に置き換わっているものも多数あるが、江戸時代の装束や小袖の裂によるものも含まれる。能面の名称を織り出した錦や金襴の面袋も見られ、面袋データベースの確立とともに伝来が判明する例が多く出現する見通しがたった。

12. 大倉集古館

大倉喜八郎が収集した作品群の一部で、鳥取藩池田家・岡山池田家の能面を多く含む。旧来のものと考えられる面袋には、能装束裂や紫地に藤巴紋を織り表した紋織物や、黄緞の裂(12-1)も見られる。大倉集古館の能面群の中核を為すと考えられる鳥取藩池田家の能面の数は、元は、1000面以上にのぼるとも言われるが、現在は前田家同様各地に分散している。能面の多くは、享保年間(1716~1736)に伏見の屋敷で発注されたことが能面裏の銘記からも知られていた。



12-2

おそらく面袋もこの時代に調製されたものと考えられ、現在まで伝来しているものには題箋部分に能面の収集の経緯などを記す特徴的な墨書がみられることが多い。なお、前田家同様、池田家についても、備前・因州の間で道具の移動があったものと考えられるため、今後は岡山藩池田家の面袋との比較調査も必要と考える。

貼札から伝来が判明

特徴的な事例

形状の特徴

2-1 国立能楽堂



2-1 Nntj collection

8-1 尾山神社



8-1 Oyama Shrine

2-1 は大聖寺藩前田家伝来の面袋。8-1 は侯爵前田利嗣が明治時代尾山神社に寄進した能面にもなっていた袋。双方の形状に同一の特徴がみられる。

材質の特徴

1-1 左=国 (文化庁)、2-2 右=国立能楽堂 3-1 松坂屋コレクション 1-2.国 (文化庁)

1-1



2-2



3-1

1-2



1-1 Agency for Cultural Affairs、2-2 Nntj collection 3-1 Mastuzakaya collection

3-1 は加賀前田家伝来作品であり、1-2 はその支藩である大聖寺藩前田家伝来能面の面当である。共通する染織品や題箋の特徴が一致する作品が存在し、双方の能道具の交流が窺える。

銘記の特徴

4-1 マーヴィンコレクション



3-2 松坂屋コレクション



4-1 Stephen.E.Marvin collection

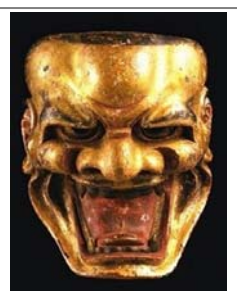
3-2 Mastuzakaya collection

3-2、加賀藩前田家の売立てにより面箆笥ごと購入しているため伝来が明らかであったが
4-1 は、面袋により、その伝来が明らかとなった。

加賀藩前田家の面袋は、装束の畳紙同様、作者や伝来、修復の記録が記されるものがあり
当時の御細工所の担当者により記されたものと考える。

題簽の特徴

2-3 国立能楽堂コレクション



1-3 国（文化庁）



2-3 Nntj collection

1-3 Agency for Cultural Affairs

異なる時期に収蔵された上記 2 点はいずれも獅子口の面袋である。1-3 は大聖寺藩前田家伝
来であることが明らかであったが、2-3 の題簽の材質、形状の特徴のなどが 1-3 と一致すること
から、その伝来が明らかとなった。

【今後の課題】

本研究により、面袋は内包する作品の保護緩衝材としての役割のみならず、茶道具の仕覆同様に大
名家の家格と嗜好を色濃く反映するものであり、染織史研究においても貴重な資料であることが明らか
となった。今後は、未調査作品の調査を進めデータを集約させるとともに、文献史料により伝来の確証
を高め、他の染織作品との比較により、繊維組織の検証を進めたいと考える。本調査データが、様々
な分野の研究に活用されることを望むとともに、更に研究を重ねたいと考える。

【参考文献】

1. 『隣忠見聞集』能楽史料 第二編 わんや書店
2. 「根来寺所蔵の能楽面袋・面当について」河上繁樹『根来寺文化研究所紀要題 6 号』
(2011.3) pp38
3. 『染と織の鑑賞基礎知識』小笠原小枝(1998)